

屯倉神社（みやけじんじゃ）

開運松原六社参りのひとつ。平安時代前半の天慶5年（942）、菅原道真を祭神として創始されたと伝える。他に素盞鳴尊・品陀別命も祀る。同地は古墳時代、天皇家の直轄とされた依網屯倉の旧跡と伝え、屯倉（三宅）の名もこれによる。道真を祀る以前は、土師氏（のち菅原氏に改姓）の祖神である天穗日命を祀る穂日の社があった。

本殿には、等身大の菅原道真坐像が安置され、挿首形式の頭部は南北朝時代のものである。近世に後補された体内には元和8年（1622）に書かれた丹生講式や柿經の法華経8巻、舍利2粒が納められていた。また、近世初頭の近衛信尋自画賛の渡唐天神像、後陽成天皇たつ筆の菅原道真画像、近衛基熙の「南無天満大自在天神」名号など道具に関わる伝承品も多い。拝殿前には穂日の社時代、道真が九州へ左遷の折、同社に立ち寄り座したという石が残る。「神形石」と呼ばれ、妻屋氏が文久2年（1862）に標石を建立している。

他にも、南北朝時代の阿弥陀三尊画像や弘法大師像、江戸時代に皇室で用いられていた草履「おめぶと」などがある。西方寺（三宅中）に移されている平安時代後期の十一面観音像は、同社の神宮寺であった梅松院（現社務所の地）の本尊であった。

本殿北側には、同じく三宅に鎮座した延喜式内社の酒屋神社を合祀している。